

# 発達障害者の表情認知の特徴を明らかにするための研究

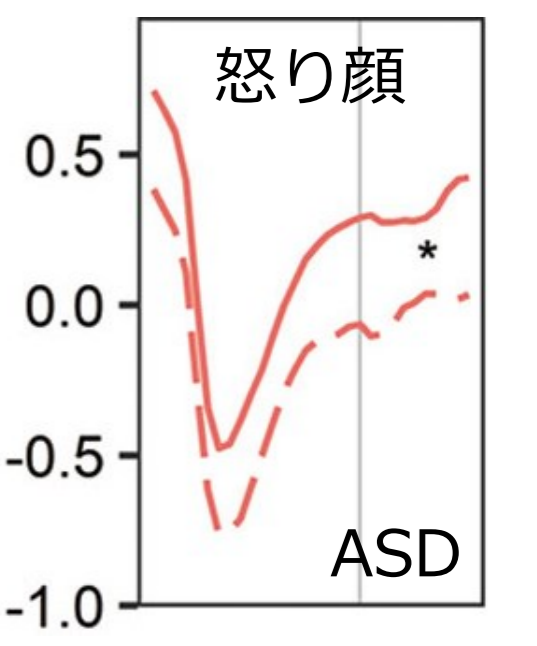
「変化する表情をどのように感じるか」について、自閉スペクトラム症の方と定型発達者の方での特徴を調べています

## 表情から感情を読みとることの難しさ

発達障害の1つである自閉スペクトラム症（ASD）は、社会的なコミュニケーション場面での困りごとや行動の反復・特定の事柄への興味の集中が特徴とされています。その背景には、視覚・聴覚・触覚など感覚の捉え方が定型発達者と異なっていることが関係する可能性があります。視覚の中で、相手の顔から感情状態を推定することは、コミュニケーションにとって重要です。

## 研究1：変化する表情から感情を読み取る際の特徴

定型発達者は、一定時間のなかで表情が表示された時間の割合を「感情の強さ」として見積もりができることがわかりました。これに対して、ASD者の多くでは、怒り表情の割合の見積もりが苦手であることがわかりました。怒り表情を見た時の瞳孔径の拡大が顕著（右図）であるため、過覚醒がこの現象に関連する可能性を考えています。



\*論文として発表 (Harada et al., 2024 Front Psychiatry)

## 研究2：感情の推定に先行する表情が及ぼす影響の調査

現実には、表情は時々刻々と変化しているため、表情変化が感情の推定に及ぼす影響を考える必要があります。現在取り組んでいる研究では、画面に表示された顔画像の表情の強さを判断する際に、直前に表示された表情（先行刺激）が与える影響を調べています。



テスト刺激の表情の強さを回答してもらう課題

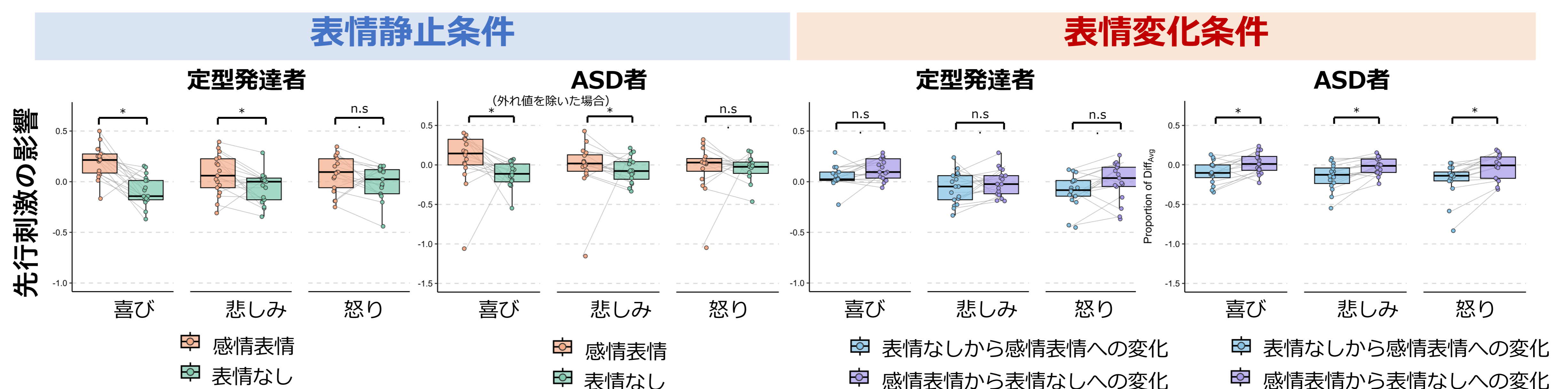
### 実験手続き



## 先行する表情変化はASD者の表情認知に影響を与える

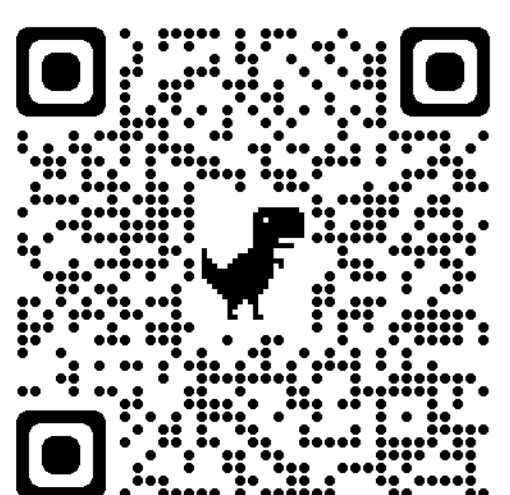
実験の結果、定型発達者では、先行刺激として静止画の表情顔を表示すると（表情静止条件）、テスト刺激の感情をより弱く評価する傾向がみられました（左下図）。ASD者の傾向も同様でしたが、大きな個人差が観察されました。一方、先行刺激として、変化する表情を表示した場合（表情変化条件）には、定型発達者では、一定の傾向はみられないのに対して、ASD者の判断は、先行表情に引きずられることを発見しました（右下図）。触覚では、ASD者は、先行する感覚刺激の影響を受けにくい可能性が報告されていますが、それを覆す結果です。この違いがコミュニケーションに与える影響を検討し、将来の支援に活かしていきたいと考えています。

\*学会発表 (Neuro2025@新潟朱鷺メッセ)



表情から感情を読み取る過程を調べて、コミュニケーションの円滑化を目指します

参加者募集に関する連絡先



←詳しい研究参加の説明と連絡先はこちらのQRコードから

もしくは dds\_exp@rehab.go.jpまで！

和田 真 (脳機能系障害研究部・発達障害研究室長)  
wada-makoto@rehab.go.jp  
Kevin Widjaja (脳機能系障害研究部・流動研究員)  
kevin-widjaja@rehab.go.jp